



旧曆11月15日  
近江屋事件  
南海部 覚悟



丹波の山塊を登り切った若狭の寒気が、冷却降下して盆地に淀む・・・初冬の京都。表通りから一本入った狭い路地に面して、鄙びた醤油屋が一軒。軒桁に重ねた年輪が黒々とくすみ、夏に新調したばかりの若い犬矢来と、石畳の暗い艶だけが、瑞々しく際立っている。



酔客の喧騒もそろそろ寢床につく時刻、離れの土蔵を見下ろす二階の小部屋では、二人の男が鍋を突つきながら酒を酌み交わしていた。

「何なんじゃ、あの梯子は？」

火照った顔を冷まそうと、障子を半分開けて勾欄に掴まりながら、眼下の庭を見下ろしていた男が呟いた。

「そいから飛び降りて、梯子をつとて藩邸に逃げ込むちや。何かあった時の用心ぜよ、げに弥太郎のお節介じゃ。」

見ると、土蔵の脇の高塀に、塀の七部ほどの高さまで梯子が掛けられている、高塀の向こう側は、土佐藩京屋敷（藩邸）であった。

「まっこと、お節介にゃ違くない・・・あの後藤が素直に受け入れるちゅうとは思えんげに。」

部屋の奥で、小鉢のしゃも肉を一心に頬張っている大男は、面長の顔にくせ毛の鬣を結って、お世辞にも優雅な風体ではない。

それに比べ窓際の男は、遥かに小柄ながら、端正な顔立ちだった。

「藤吉！酒がのうなった、二三本つけてきちくれ！」

大男が階下に向かって甲高い声を上げた。

「ほんなら、おんしや春嶽公は、首班もんは公選で決める——と、ゆうんねや。」

「その通りぜよ、議員で構成されち内閣で、首班を国会が指名するちゆうんじゃ、民意反映にならんじゃか。」

「けんど、皇室との兼ね合いはどういたもんじゃ？日本は、共和国がや二元代表制がやないぜよ！」

「並存しよっただく、一市民として・・・。」

「公民権を行使しよっただくねや？——天皇陛下に！」

大男が急に唇の前で人差し指を立てた、窓の外の闇を見廻す、用心深そうに身を縮めた。

「でかい声で土佐訛りはやめとけ、訊かれたら直ぐに土佐もんと分かるぞ、闇に耳ありだ、三条の大橋の事件以来土佐もんは新選組につけ狙われている・・・大体 “しよっただく” なんてどこの言葉なんだ？」

「——お前が先に使ったんだぞ。」

小柄な方が不満げに答えた。

「陛下も日本人だ、そうして頂くのが本来だろう。」

「首班選挙に立候補されたら如何するんだ、それこそ権力が一点に集中するぞ。」

「それが民意ならそれで良いんじゃないのか、アメリカの大統領だって民意だ。」

「俺は議員内閣制を、天皇が公民権を行使されない合理的な根拠として捉えている、同時に権力を集中させない担保でもある。主権は国民に存するが、あくまで天皇が国家元首で日本の代表だ。」

「君臨すれども、統治せず・・・か？」

「——だがな、日本の歴史の中で、天皇が直接に国を統治された時代があったか？軍を統帥された事実があるか？天皇ほど国家の政治実務と乖離した国家元首は他に存在しない。だから天皇に国の過去と、行く末に関する責任は無いのだ。その地位が、世襲によってのみ継承されるのは、些か特殊だが、そのような例が他の日本人に無いわけでもない。一般の国民と同様に、権利を行使されればいいのだ。」

「陛下のお立場が、時の政権と乖離してきたというのには同感だが、日本人はどの時代でも、皇室を尊敬と親愛の眼で見続けてきた、天皇と国民が乖離した歴史は無い、常に同極に存在したんだ。そういった理由で俺は、多極で抗争する国政に関与されるべきではないと思うのだが・・・まあいい。ところで、春嶽公は軍隊について何か話されたか？」

「——海軍が日本の要じゃ言ってたな！」

深い闇の遠方から、夜鳴き蕎麦の物悲しい声が聞こえる。

凍てつく辻を廻って、温かい汁や蕎麦を売り歩くのは、近年江戸から伝わった商売だった。

醤油屋の二階にも、深々と寒さが這い上がり、男たちは肩にかけていた襦袢の襟を絞って、長火鉢にしがみ付く。



「お前は相変わらず、神戸の操練所の再建に力を入れているようだが、国の軍隊は海軍だけじゃないぞ——陸軍はどうなるんだ！海上遥か何海里も離れた軍隊に、国が護れるわけ無いじゃないか！」

「——誰が海軍で国を護るって言った！」

長火鉢の灰に、火箸をぶすぶす突き刺しながら大男が応えた。

「海軍を育成する目的は戦争なんかじゃない、分か

るか？——利権だ。国際的な外交利権の確保の為だ、其のための国家の後ろ盾だ、交渉相手に対するハッタリなんだ。百年兵を養うは、唯々平和を希求せんが為。——平和というのはな、国内の安定と外交利権の維持の上に立脚する。国内の安定に責任を持つのが警察で、外交利権の維持確保を執行するのが海軍だ、地勢的にも国民性の上からも、日本は海軍を重視しなけりゃならん……。」

鍋を掛けた長火鉢の火に勢いがなくなり、男は柏手を打って再び階下の下男を呼ぶ。

醤油の香りを伴って相撲取りの藤吉が上ってきた。

追加された炭の熱で、部屋の空気も生氣を取り戻した。

「——陸軍は必要ないって言うのか？」

「——何度も言うが、軍隊は戦争を戦うために在るんじゃない、戦争を回避して少しでも有利な立場を確保、維持するために存在するんだ。」

「お互い、瘦せても枯れても武士だぞ……戦うために生まれて来たんじゃないのか……。」

「俺はそんなものに生まれた積りはない！小さな領地をやり取りして戦った戦国の昔とは違うんだ、よく考えろ！海に囲まれた日本が、相手の領土深く攻め込むことが無いとすれば、陸軍なんて要らんじゃないか——。」

「日本が攻め込まれたらどうするんだ！」

「アメリカ人やイギリス人が日本を占領して、日本人を奴隷にして、稲作の代わりに牛や豚や羊を飼って、プランテーション（農場）始めるとでもいうのか？」

「馬関の戦をみるまでもない、海戦に敗れて上陸されたら、全て終わりなんだ。近代戦

争で陸上戦になれば、国家同士が形振り構わず総力を振り絞って戦うことになる、歯止めが効かん、勝とうが負けようが国内の生産は完膚なきまで破壊される、残された者が何十年かけても贖いきれない深い傷になる。」

「相手の周りの海で、利権を漁っちゃったが方が遥かに利口ちや———ほがな事は何所の国の政府も承知しちゅう。」

「けんど万が一、そのようだいの分からん為政もんがおるとすれば……。」

「あり得んぜよ！———けんどあったとしたら、げにこの世の不幸ぜよ。」

「———けんど！」

「むつこいぜよ、中岡！」

手にした玉杓子をいきなり投げつける、額に当たって乾いた音がした。

「こなくそ、龍馬！」

「ほたえな！」

立ち上がった両者の気迫で、行燈の灯が吹き消され、真っ暗闇の中で男二人の怒号が交錯する。

とても大人の喧嘩とも思えないが、狭い部屋の中二人とも酩酊が進み、漆黒の闇の中から手当たり次第に物を投げ始める。

下男の藤吉が慌てて階段を駆け上がってきたが、闇に眼も馴染まず、何が起こっているのか見当もつかない。

そんな中、最前馴染の板前を部屋に呼んで、鱧を造らせた折の骨切包丁、鍋の軍鶏肉を叩いた出刃包丁、菜切り包丁などが俎板と共に下げられもせずに其のままになっていた。

後先考えずに手当たり次第に投げるものだから、やがてそれらも漆黒の闇の中を飛び交うことになる……。

醤油屋の二階に、主人の新助と共に二人の男が駆け込んできたのは、一時の後だった。惨状の床には、全身血まみれで息も絶え絶えの小男が一人、他の二人は既に事切れて横たわっていた。

男のひとりが、小男を抱き上げ顔を覗き込んで大声を出す。

「―――慎太、慎太やいか！なんちゃーがやないか！」

遺体を見下ろしていたもう一人が、「龍馬じゃか！龍馬が死きしもうた！」

夜の空が重い瞼を持ち上げ、障子の向こうが明るくなり始めた。

「相撲取りは、下おとこしの藤吉どす・・・弥太郎様。」

中岡の手当てをしながら、主人の新助が応えた。

「―――しょうまっこと二人で喧嘩したがか？」

弥太郎と呼ばれた男が問いただす、再び新助が深く頷いた。

「出刃も骨切も血糊でべっとりじゃか、得物はほかにないろう。間違いないねや。―――弥太郎、わりいが柱に二三箇所刀傷つけちくり。」

怪訝そうな弥太郎に、「土佐んいごっそうが、喧嘩で命落としたちや、聞こえがわりいぜよ、二人ともおんしの友垣じゃいか。」

自らの脇差に龍馬の血糊を乗せて、床に掛かる軸に向けて振り上げる、血痕が斜め上に拡がった。

「新選組の斎藤らあいう男の脇差ぜよ、壬生の質商から買い取った。」

鞘を床にころがし、骨切包丁、菜切り包丁、出刃包丁などと共に抜き身の脇差を弥太郎に渡した。

「分からんように処分しとおせ。まっこと手にあわん、容堂公のご尽力で、大政も奉還されたちゅうがやき。」

「後藤様、どういて見廻組じゃのうて新選組なんにかあーらんか？」

「―――三条大橋の恨みぜよ！」

そう言い捨てると、後藤といわれた男は階段を静かに降りて行った。

「陸援隊はどういた、海援隊（亀山社中）はどういたもんじゃお！才谷屋！」

残された弥太郎は、血に汚れた畳に突っ伏して慟哭した。





慶応三年十一月（霜月）十五日、京都四条河原町、近江屋事件の、これが真相である。  
おわり。

以上、当然ではありますが、全てフィクションです。悪しからずご了承ください。

旧暦11月15日 近江屋事件

<http://p.booklog.jp/book/113885>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113885>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト